

| | |
|---------|--|
| 氏名 | 江尻 健太郎 |
| 授与した学位 | 博士 |
| 専攻分野の名称 | 医学 |
| 学位授与番号 | 博 甲第 5878 号 |
| 学位授与の日付 | 平成31年3月25日 |
| 学位授与の要件 | 医歯薬学総合研究科 生体制御科学専攻 (学位規則第4条第1項該当) |
| 学位論文題目 | Vascular Injury Is a Major Cause of Lung Injury after Balloon Pulmonary Angioplasty in Patients with Chronic Thromboembolic Pulmonary Hypertension (慢性肺血栓塞栓性肺高血圧症患者における肺動脈バルーン形成術後の肺障害の主な原因は血管損傷である) |
| 論文審査委員 | 教授 笠原真悟 教授 大藤剛宏 教授 大月審一 |

学位論文内容の要旨

肺動脈バルーン形成術(BPA)は、慢性肺血栓塞栓性肺高血圧症の肺血栓内膜摘除術が困難な患者における代替治療である。しかし、BPA後に生じる肺障害は重大な合併症である。本研究ではBPA後肺障害の発症に関与する要因について検討を行った。

BPAを施行された慢性肺血栓塞栓性肺高血圧症の患者76人、297回のBPAに対して、BPAの前後に高分解能CTスキャンを行って、BPA後の肺障害(新たなスリガラス影、浸潤影、および胸水)を評価した。肺障害を認めたのは138例(47%)であり、術後に人工呼吸管理を要したのは40例(13%)であった。BPA施行中の血管造影で造影剤の血管外漏出所見が認められるものをBPA関連血管損傷と定義したところ、50例(17%)に同所見を認めた。多変量解析ではBPA関連血管損傷はBPA後肺障害の有意なリスク因子であった。また、術前の平均肺動脈圧高値とBPA関連血管損傷は、肺障害発症時の人工呼吸管理の有意なリスク因子であった。

論文審査結果の要旨

研究の背景と目的:慢性肺血栓塞栓性肺高血圧症(CTEPH)に対する肺動脈バルーン形成術(BPA)は外科的な肺血栓内膜摘除術が困難な患者における代替治療である。しかしながら、BPAも術後に重要な合併症である肺障害を起こすことが知られており、この肺障害により生命の危険性も高くなる。この発症の要因につき検討し、術前の平均肺動脈圧と術後の人工呼吸器管理が有意な危険因子であるという結果を得た。

予備審査における疑問点や問題点:この疾患群に対する治療はとて難であり、多くの患者に対し、このような治療を積極的に行い良好な成績を得ることは特筆すべきことである。さらにそこに関わる肺障害の危険因子を探求することは、今後のこの疾患群に対する治療の成績向上のためにとて有用である。この研究結果をもとに、さらなる成績向上の因子を探求していただきたいと考える。本研究は、多くのしかも特殊な治療を通しての臨床研究で、国内外への情報発信源として注目すべき研究であり、価値ある業績と認める。

よって、本研究者は博士(医学)の学位を得る資格があると認める。